

研究課題 (テーマ)		高齢家族介護者におけるヘルスリテラシーと認知的介護評価 －肯定的側面と否定的側面との関連－		
研究者	所属学科等	職	氏名	
代表者	看護学部 看護学科	助教	稲村 尚子	
研究結果の概要				
<p>高齢家族介護者におけるヘルスリテラシーと認知的介護評価の関連を検証し、看護支援への示唆を得ることを目的とした。富山県内の訪問看護ステーションの協力を得て、2025年10月～2026年2月に自宅で介護を担う65歳以上の高齢家族介護者を対象とした、14-item Health Literacy Scale (以下、HLS-14) および認知的介護評価尺度を含む自記式無記名式質問紙調査を行い、統計学的手法を用いて関連性を検証した。</p> <p>研究協力を依頼した訪問看護ステーション120か所のうち、宛先不明および現在休止中が8か所であった。残る112か所のうち、研究協力が得られた19か所の訪問看護ステーションに調査票174部を配布、82名から回答を得た(回収率47.1%)。本研究の対象年齢に該当しない者および、HLS-14または認知的介護評価の質問項目に1項目でも欠損のある者を除外した76名を分析対象とした(有効回答率92.7%)。</p> <p>HLS-14の総得点および各下位分類(「機能的HL」、「伝達的HL」、「批判的HL」)、コントロール変数として対象者要因である年齢、性別(男性=0, 女性=1)、仕事の有無(無し=0, 有り=1)、被介護者との続柄(続柄: 子・親=0, それ以外=1)、ならびに被介護者要因である認知症の有無(無し=0, 有り=1)および要介護度を独立変数、認知的介護評価尺度の否定的評価および肯定的評価を構成する因子毎の得点を従属変数とし重回帰分析を行った。</p> <p>その結果、認知的介護評価の否定的評価である3因子との関連は認められなかった。しかし、肯定的評価である3因子のうち『高齢者への親近感』及び『自己成長感』の2因子において、「機能的HL」(高齢者への親近感: $F=1.863$, $\beta=0.309$, $R^2=0.094$) (自己成長感: $F=1.909$, $\beta=0.286$, $R^2=0.098$) と HLS-14 の総得点(高齢者への親近感: $F=1.918$, $\beta=0.296$, $R^2=0.079$) (自己成長感: $F=2.178$, $\beta=0.372$, $R^2=0.099$) がそれぞれ独立した有意な関連を示した。そのうち、HLS-14の総得点と『自己成長感』はF検定も有意($F=2.178$, $p=0.047$)であった。</p> <p>これらのことより、高齢家族介護者のHLを高めることで認知的介護評価のうち、『高齢者への親近感』・『自己成長感』といった介護者の肯定的評価が高まる可能性が示された。特にHLの下位分類で関連が認められた「機能的HL」向上への支援について、視覚や聴覚の加齢性変化に応じた健康情報の提供やデジタル機器への対応、専門用語への配慮や提供する情報量の調整、Teach-back法の活用などが効果的であると考えられた。</p>				
今後の展開				
<p>引き続き分析を進め、本研究の成果を学術集会にて公表し、論文投稿を目指す。</p> <p>今後の展開として、サンプルサイズや対象地域を増やし、結果の一般化可能性を高めることが必要である。また、本研究は横断研究であり関連要因の因果関係があるとは言えないため、今後は高齢家族介護者がどのように健康情報を理解し、解釈し、活用することで、『高齢者への親近感』や『自己成長感』といった介護に対する肯定的評価に繋がっているのか、そのプロセスを質的研究や縦断研究などで明らかにしていく。</p>				